博士学位論文審査要旨

氏　　名	王　海翠
学 位 の 種 類	博士（歴史民俗資料学）
学 位 記 番 号	博甲第 311 号
学位授与の日付	2024 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
学位論文の題目	華北農村の民俗宗教－河北省唐庄村とその周辺の「行好」を中心として－
論 文 審 査 委 員	主査　神奈川大学　教授　周　星
	副査　神奈川大学　教授　安室　知
	副査　神奈川大学　准教授　丸山泰明
	副査　神奈川大学　名誉教授　佐野賢治

【論文内容の要旨】

本論文は、中国の華北農村における民俗語彙である「行好」に焦点を当てており、その意味を解明したうえで、善行など道徳や規範のレベルにとどまらず、「行好」を明確な民俗宗教の信仰現象として論じるものである。地元住民の日常生活における「行好」の実態を記録・考察すること、地域社会における「行好圏」の存在を明らかにすること、宗教職能者である香頭による「行好」、及び香頭が村人の「行好」活動を案内・指導することによる地元の人々の信仰生活における位置づけ、そして「行好」の実践が地元の人々の生活や人生にとってどのような意味を持っているかなどについて、フィールドワークに基づいて検討する。

本論文の構成は以下の通りである。序章から終章まで、全 7 章で構成され、最後に参考文献と付録になっている。

序章
第 1 節　研究背景と目的
　1　研究の背景　　2　研究の目的
第 2 節　先行研究と問題の所在
　1　先行研究
　　(1)日中の民間信仰・民俗宗教をめぐる研究
　　(a)日本の民間信仰・民俗宗教をめぐる研究
　　(b)中国の民間信仰・民俗宗教をめぐる研究
　　(2)華北農村の民間信仰・民俗宗教をめぐる研究
　　(3)「行好」をめぐる研究
　2　問題の所在
第 3 節　研究の方法と論文の構成
　1　研究の方法　(1) 文献研究法　(2) フィールドワーク　(3) 民俗語彙
　2　論文の構成
第 1 章　調査地の概要
はじめに

第 1 節　唐庄村の概要
　1　　唐庄村の地理・人口　　2　　唐庄村と周辺村の関係
　3　　唐庄村の生業概要　　(1) 農業　(2) 工場
　4　　唐庄村の「党支部」と「村民委員会」
　5　　唐庄村の生活文化　(1) 衣食住　(2) 年中行事　(3) 唐庄村の習俗
第 2 節　唐庄村における宗教施設
　1　　宗教の状況
　2　　唐庄村の宗教施設　(1) 三官爺廟と菩薩殿　(2) 三官爺における伝説
　3　　民家の宗教空間
おわりに
第 2 章　唐庄村及び周辺の民俗宗教活動:「行好」
はじめに
第 1 節　村の民俗語彙:「行好」
　1　　「行好」とは何か　　(1) 「行好」の定義　(2) 「行好」と民間宗教　(3) 「行好」の範囲
第 2 節 「行好」実践の次元
　1　　個人の次元　(1) 村人の家　(2) 「香頭」の家
　2　　村の次元　　(1) 「行好」と雨乞　(2) 祭災(祓い):厄払いの儀式
　3　　集団・グループの次元
第 3 節 「神譜」と「経」
　1　　「行好」に使われる「神譜」　　(1) 「神譜」とは　　(2) 「神譜」の開眼供養
　2　　「行好」における「経」
　3　　「経」に表象されている親孝行
第 4 節 「行好」と宗教職能者の「安卓」
　1　　「安卓」とは　　2　　「安卓」の儀式　　3　　「行好」、「安卓」および「香頭」
おわりに
第 3 章　唐庄村及びその周辺を含む「行好圏」
はじめに
第 1 節　先行研究の検討　1　　祭祀圏と信仰圏　　2　　村民が実践する「行好」について
第 2 節　唐庄村周辺の宗教施設
　1　　民家と廟の宗教空間　　2　廟における神仏　3　村とその周辺における「行好圏」
第 3 節　地域における「行好圏」
　1　　廟と廟会
　2　　廟会の機能　　(1) 交易　　(2) 娯楽　　(3) 「行好」:宗教活動
　3　　村民が実践する「行好圏」
おわりに
第 4 章 「香頭」と「看香」
はじめに
　第 1 節 「香頭」とその種類
　　1　　「香頭」とは
　　2　　「香頭」の分類
　　(1) 「看病看事」を行わない「香頭」
　　(2) 「看病看事」を行う「香頭」

(3) 異同
第 2 節 「香頭」の組織と儀式
1 「香頭」と弟子
(1) 師匠と弟子の関係づける
(2) 師匠と弟子の関係を維持する
ⓐ 「香頭」の誕生日 ⓑ 「賀光」:「開眼」した神仏への祝する
2 「香頭」が行う儀式
(1) 「看病」(診る)
(2) 「浄宅」:厄払いの儀式
(3) 「解鎖」(鎖をはずす):トラブル解けの儀式
第 3 節 「看香」の方式
1 「看香」とは
2 「看香」することできる(成巫プロセス)
(1) 「打磨」:自然の召命型 (2) 「祖根」:世襲型 (3) 「出功」:個人的探求型
3 「看香」の方式
おわりに
第 5 章 「行好」における「上供」
はじめに
第 1 節 「上供」
1 「上供」:神仏に供物を捧げること 2 「上供」の民俗
3 供物
(1) 供物の種類 (2) 平日の供物
(3) 非日常の供物 (4) 供物の食べ方
(5) 供物の並べ方と数量 (6) 供物の供える場所
第 2 節 重要な年中行事における「上供」
1 師走とお正月 2 竈神(竈王爺)への「上供」
3 「上平安供」における親孝行
(1) 一般村民の家での「上平安供」
(2) 「香頭」の家での「上平安供」
(3) 「上平安供」に反映されている親孝行
4 「倉神」への「上供」
おわりに
終章 結論と今後の課題
第 1 節 結論
(1) 多神の世界:「行好」に参拝される神仏の系譜
(2) 「行好」を解く:信仰としての実践性、慈善性
(3) 地域社会と「行好圏」
(4) 中国社会における民俗宗教＝「行好」の位置付け
第 2 節 今後の課題
参考文献
付録:【経】
謝辞

序章では現代中国における伝統文化の復興を本論文の研究背景として、本論文の研究目的は現在の華北農村で普通の人々がどのような信仰・宗教生活を送っているかを明らかにすることにあると説明した。また、日中の民間信仰・民俗宗教に関する研究、華北地域の民間信仰・民俗宗教に関する研究、および「行好」に関する研究をそれぞれ分けて先行研究を整理し、華北農村の「行好」活動が民俗宗教の実践形態であることを学術史に位置づけた。さらに、本論文の研究方法について、文献研究、フィールドワーク、民俗語彙の重視などを説明した。

第一章では、華北地域の縮図として調査地である唐庄村を取り上げ、唐庄村の地理、人口、周辺村落との関係、生業、「党支部」と「村民委員会」、文化生活、宗教施設などについて概況を述べている。唐庄村を研究対象としながらも、この村落が自給自足の単位ではなく、周辺の都市や村落など外部と強く結びついていることを明らかにした。経済生活は言うまでもなく、人々の信仰生活も同様である。唐庄村の宗教諸施設の説明を通じて、村人の信仰する宗教の在り方を明らかにした。天主教が唐庄村において少数派である一方、多くの人々が仏教、道教、儒教を明確に区別せず、現世利益や生活安定を求める心理に従って、どの神仏でも信仰していることが実態である。地元の人々の信仰・宗教生活の全体像を理解し、この複合的な宗教形態を正しく理解することが重要である。

第二章では、村人に日常的に、かつ頻繁に使われる民俗語彙＝「行好」について、現地調査を踏まえて、その意味とは何か、すなわち 「行好」の定義、 「行好」と民間宗教の関係性、 「行好」の及ぶ範囲などを説明し、「行好」を単なる道徳的な善行としてなくて、民俗宗教的な実践でもあるとして探究した。「行好」活動の実践における 3 つの次元、すなわち個人の次元、村の次元、集団の次元に焦点を当てて現地調査を行った。村人の中で特に「行好」を熱心に実践する形式の一つは「神譜」（神仏の群像）を祀ることである。「神譜」を神聖化させるために、霊的な力を持つ「香頭」に頼んで、「神譜」の「開光」儀式を行う。ただ、この儀式は「神譜」を「開光」するだけではなく、地元の人々によって「安卓」とも呼ばれる「神卓」を自宅に設置する。「安卓」とは、自宅で「神卓」の「神仏」を礼拝・供養することを意味している。家庭内に「神卓」があることは、「行好」活動をより虔敬に実践することである。供えられる「神譜」には、多神教の特徴が特に目立ち、理念上では万神を含めるが、これらの万神にも上下の階層関係が存在し、人々の心に想像されている神仏の世界はもはや官僚的な体系のように映し出される。ただし、実際の日常生活では、具体的な諸問題を解決するのに役立つ神仏が、時折、地元の村人にとってより重要、あるいは高い地位を持つことがある。これらの事実は、地元の人々の神仏体系に関する認識が複雑なイデオロギーや現世利益に左右されていることを意味する。

第三章では、学術界の祭祀圏と信仰圏の理論を整理した。祭祀圏の理論は祭祀儀式の共同性を強調し、つまりやや強制的であるとされている一方、祭祀圏に基づいて発展してきた信仰圏の理論は、人々の信仰・宗教生活の自発性を認めつつも、主神を中心に据えることを強調している。著者はこの 2 つの分析概念を用いて、華北農村における「行好」の信仰実践の実態を分析しようとした。地元では人々の「行好」の実践は、常に村人個人、あるいは複数の個人がある「香頭」を中心にしており、「行好」の個人あるいは少人数のグループが実践する「行好圏」は、空間的な範囲として、自分の家で「神譜」や「神卓」を祭ることから始まり、次第に信頼する「香頭」の家の「神譜」や「神卓」へ広がり、「香頭」が主催する信仰活動に参加したり、自分たちの村の廟会や近隣の村廟に行ったりする。さらには、個人で、あるいは「香頭」が主催する「行好者」の小集団と一緒に、遠くにある宗教施設＝「四山九頂」を巡礼しに行くこともある。このように、「行好」の人々による信仰・宗教活動の実践は、実に広範囲の空間に及ぶ。これらの空間の範囲、すなわち異なる「行好者」が実践している「行好圏」が重なり合うことはあっても、完全に重なり合うことはなく、それがまさに「行好圏」の多層性を示している。個人または「行好者」の小さなグループの「行好圏」に影響を与える

要因は、大別すれば、日常生活における人間関係の幅であり、または「行好」を行う人々がどのような神仏の霊験を信じるかの二つである。また、「行好圏」は個人、あるいは複数の個人を中心とした「行好」の信仰実践の活動並びに範囲であるため、祭祀圏の理論が強調するような強制性がなく、また信仰圏の理論がある神仏を中心とすることもない。著者は、地元での現地調査を踏まえて、かつ祭祀圏と信仰圏といった学問的理論に触発されて、華北農村における「行好」という宗教実践の実態を分析するために「行好圏」の概念を提案した。

第 4 章では、地元の宗教職能者である「香頭」に焦点を当て、彼らの「行好」の実態を調査し、明らかにした。地元では「香頭」と言えば、「看病看事」を行う「香頭」とそうでない「香頭」に分かれる。本章は特に「看病看事」を行う「香頭」に焦点を当て、その「行好」の実践活動について検討した。これらの「香頭」は、常に「看香」という宗教儀式を通じて、依頼者の原因不明の病気や諸問題を治療・解決する。依頼者を助けることは「行好」であり、「香頭」にとって最大の功徳でもある。それと同時に、「香頭」は依頼者に対し、原因不明の病気や厄介事を解決するために、度々「行好」を行うように勧めることがある。すなわち、「看病看香」はまさに「香頭」が人々に対して宗教活動＝「行好」を勧善する一つの手段である。地元の人々が「行好」の観念を共有しているため、自ら信仰活動を行う場合があれば、「香頭」に「行好」の名目で、宗教活動を行うように勧誘・説得される場合もある。現地調査によれば、地元の「行好」する実践者は「徳を積むことは誰にも見えないが、自分の善行は神に知られている」という人生観や宇宙観を持っていることは注目されるべきである。言うまでもなく、このような「看病看香」の「行好」実践は地元ではまだ公然と行うことができない。このような宗教実践を「民俗宗教」として再定義し、国家がそれらを認めるべきであり、それらの「行好」を実践する人々にも信仰の自由や宗教活動の正当性を与えることは、検討に値する課題である。

第五章では、地元の村人が神仏との交流の最も典型的な方法と考えている「上供」を通じて祈願の意志を表明することについて述べている。そして、「上供」が頻繁に行われる時期は旧暦の 12 月と 1 月である。本章では竈神への祭祀、「上平安供」や倉神への祭祀などの事例が挙げられている。信者として、村人が思い浮かべる方法は、さまざまな食品を大量に用意し、供物の数と種類によって神仏への感情や祈願を表現することである。人々は供物にさまざまな意味を与え、それらを「上供」することにより、普通の食品を神聖なものに昇華させ、それらをもって神仏との関係を築く。地元の人々は、この神仏との慣習的な契約である「上供」の儀式を通して、現世利益や功徳を得ることを望んでいる。最終的に、これらは世俗的な満足だけでなく、信者自身の内的な小宇宙（身体、生命）と外部の大宇宙（神仏が支配する世界）との共通の満足を追求するものであることを明らかにした。

終章では、論文の全体を統括し、結論を示した。(1)一般的な「行好」の実践者が家庭で礼拝する神仏、宗教職能者である「香頭」の家で崇拝・供養する神仏、村の廟、および遠い「四山九頂」に祀られる神仏などについて、現地調査を通じて、「行好」の実践者たちが信仰する神仏の系譜が多神教的な特徴を持っていることを明らかにした。(2)一般的な「行好」の実践者が行う「焼香」や「誦経」及び日常生活における善行、並びに「香頭」が依頼者の悩みを「看香」を通じて解決する「行好」活動などを分析し、「行好」が実践性を備えることを明らかにした。さらに、人々は「行好」を通じて現世利益を得ることだけでなく、功徳を積む修行の側面も持っており、宗教的な慈善性を備えていることが示された。「香頭」が熱心に人々を「行好」へ勧誘することは、徳を積むための善行そのものである。(3) 学術界における祭祀圏や信仰圏の概念に触発され、また現地調査の実態からも、華北農村における「行好」の宗教的実践を説明するには、「行好圏」を用いるのがより適切であることを明らかにした。(4)これまで中国における民俗宗教研究の視点としてその重要性が指摘されながら、具体的・実証的に検討されることが少なかった「行

好」について、本論文は「行好」を道徳や規範の問題にとどまらず、民俗宗教の信仰現象として位置づけ、明確に研究対象化としていた。

【論文審査の結果の要旨】

王海翠論文のメリットは以下の四つにある。

１，これまで中国における宗教研究の視点として重要性が指摘されながら、具体的･実証的に検討されることが少なかった「行好」について、それをただの善行、道徳や規範の問題だけではなく、明確に民俗宗教の信仰現象として位置づけ研究対象化している点はとくに高く評価される。

２，華北農村では普遍性のある「民俗語彙」＝「行好」の意味を解明したうえで、①日常生活における「行好」の実態を把握すること、②地域社会に「行好圏」を仮説として検証すること、③地元の宗教職能者である「香頭」の諸活動による「行好」を把握すること、④地域社会の人びとにとって「行好」がいかなる意味を持っているかを把握することなど、複合的な分析視点を提示し、多角的に検討している点は重要で高く評価される。

３，調査地では「行好」に関する、または「行好」とされる個々の儀礼や信仰活動について、フィールドワークの参与観察を行い、極めて詳細に実態を記述し、フィールド・データを通して具体的で実証性の高い研究を行った点は高く評価される。

４，結論として筆者が論じる「行好」の意義が、華北地域では実践性や慈善性・宗教性にあるとの指摘は説得力をもっている。とくに華北地域における「行好」の実践には、複層の次元があるとの指摘も重要である。

王海翠論文のデメリットは以下の三つにある。

１，「行好」をめぐる中国社会の政治環境、特に「行好」と中国政府の宗教政策との関係について、明らかにされていない。

２，「香頭」や「行好」を実践する一般の人々の語りが少ないことが物足りなかった。特に当事者たちの具体的な声による語りがあるならば、本論文の価値はさらに増すだろう。

３，「祭祀圏」や「信仰圏」の諸理論を整理し、自らの調査を踏まえて、地元の地域社会における人々の「行好」の宗教実践が及ぶ空間範囲を把握するため、「行好圏」という新たな概念を提示したことは、価値のある試みとはいえるが、それに対する着実で綿密な検証がまだ足りない。

以上を踏まえて、王海翠氏論文は歴史民俗資料学の論文として評価できる。また、口頭試問において審査委員の質疑応答に対していずれも相応しい応答があった。その結果も合わせ、王海翠氏に博士（歴史民俗資料学）の学位を授与することがふさわしいものと審査委員一同これを認めるものである。